

特集 トークセッション

向谷地生良 × 三好春樹 × 辻 信一

降りてゆく — 命の傾きを生きる

横浜市にある浄土真宗「善了寺」本堂の電気を消して、
ろうそくだけの明かりの中で行われた不思議なトークセッション……
生老病死をばらばらにし、人間の生命を大きなつながりから考えることが
できなくなった現代社会。

「強さ」から「弱さ」へ 「上る」から「降りる」へを
キーワードにしたら、新しい生き方が見えてきました。

【caf dela terra】(カフェ・デラ・テラ)とは……

「Terra」とは、お寺の「寺」ともうひとつ、イタリア語で「大地」を意味します。お寺を通して人とつながり、コーヒーを通して大地とつながればいいなあという想いが込められています。カフェ・デラ・テラは、横浜市戸塚区にある善了寺、戸塚の商店会、明治学院大学の教授と学生たちによって始められた（今はまだ）小さなお寺ムーヴメント。詳しくは、善了寺のホームページを。

<http://www.zenryouji.jp/>





辻 信一 (つじ しんいち)

明治学院大学国際学部教授。文化人類学者、環境活動家。「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表や環境文化NGO ナマケモノ倶楽部世話人として「スロー」や「GNH」をテーマに活動。著書に『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）など著書多数。現在「ゆっくりノートブック」シリーズを刊行中（第4巻は向谷地生良氏との共著『ゆるゆるスローなべてるの家』）。

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/index.html>

辻 信一 今日のタイトルは「降りてゆく」です。ちょっと気が抜けるタイトルですね。「降りてゆく生き方」とか「降りてゆく人生」というすばらしい理念を「べてるの家」は発信し続けています。まず、この「降りてゆく」という言葉に対して、向谷地さんからコメントをどうぞ。

向谷地生良 「降りてゆく」の後につける言葉をそれぞれが考えると、おもしろいと思います。私はソーシャルワーカーですから「降りてゆくソーシャルワーカー」、家族で言えば「降りてゆく家族」とか、教育で言えば「降りてゆく教育」とか、福祉とか。「降りてゆく」というキーワードで、自分たちの取り組みを見直すとおもしろい光景が見えてくるんじゃないかと思うのです。

「べてるの家」がある浦河町は北海道の中で一番貧しくて、弱体化が進んでいる地域です。「日本には少数民族はいない」と長い間、日本人は言い続けてきました。最近になって、やっとアイヌの人たちを少数民族として認めるようになりました。これは長い間地域の人たち自身が語ってこなかったことですが、日本の中でアイヌ民族の人たちが一番多く住んでいる町は浦河なのです。住民の3割がアイヌ民族です。べてるの歴史は、北海道の中でも経済的に貧しい地域の中で、最も困難を強いられてきたアイヌの人たち、アルコール依存症を抱えた人たちなど、そういう人たちとの歩みの歴史なのです。

そのなかで私たちは社会的な脱落者という見方をされがちな精神障害をもった人たちを、むしろ大切な生き方を私たちに知らしめてくれる経験をもった人たちととらえる時、そこから見えてくる私、家族、地域、社会があります。そういう歴史の中から「降りてゆく」という感覚は生まれました。非常に生命的な感じがする言葉だと思います。

辻 三好さんも社会の根本にある「進歩主義」を、介護の立場から繰り返し批判されていますね。

三好春樹 私は35年前に特養ホームに就職しました。私はいい意味でも悪い意味でも常識的な家庭に育ちました。特養ホームで出会う人たちは、いわば「降りてきた」人たちです。いきなり、ぼけた老人、寝たきり老人、褥瘡などを目の

社会に貢献していないやつは大事にしなくていいという
論理に対抗できる思想を探してきたような気がします
(三好)



三好春樹 (みよしはるき)
本誌発行人

前にして、どう考えていいかわかりませんでしたね。人はきっと、自分の理解から外れたものが目の前に現れると、「これはあってはいけないものだ」と思うのではないのでしょうか。専門家による治療を施して、普通の人間になるようにしてあげなきゃいけない、教育してあげなきゃいけない……、それが私の最初の見方でした。

とらえ方を一生懸命探している時に「降りてゆく人生」という言葉に出合っ
て、ストーンと理解できたんです。「降りてゆく」はマイナスだと思われていた
ものを逆にプラスだと言い張っているわけで、ものすごい開き直りです。

ただ最初は困りました。たとえば、町の敬老会にお年寄りが出席します。
そうすると政治家が長々とあいさつをします。「長い間社会に貢献してこら
れたお年寄りを大事にしましょう」などと言うのですが、貢献なんかしてな
いんですよ(笑)。ひねくれたじいさんで、前科はあるし、夫としても親とし
ても失格で、女と逃げて、病気になって戻ってきたのです。家族が介護を拒
否したので、特養ホームへ入ってきたというどうしようもない人生なのです
(笑)。そんな社会に貢献していないやつは大事にしなくていいという論理に
対抗できる思想を探してきたような気がします。

異文化に対するワクワク感

辻 三好さんは、芹沢俊介さんとの対談集『老人介護とエロス』(雲母書房刊)
の中で、「することとあること」という話をされていますね。この社会は「する」
ことを基準にしているのだから、お年寄り、障害者、病気をもっている人たちな
ど支援が必要な人たちは、「する」ことができなくなった人たちと見なされて、
生きる意味があるのかと問われざるを得ない存在になってしまっているとい
うお話だったと思います。

三好 そうですね。そんな生きる意味がない人たちに対して、社会は慈悲や救
済の対象にしたり、意味のある存在に引き上げてやるためにリハビリの対象



向谷地生良 (むかいやちいくよし)

ソーシャルワーカー。北海道医療大学教授。「べてるの家」理事。1984年に精神障害を体験した当事者や有志とともに、「浦河べてるの家」を設立。以来、精神障害を抱えた人たちと会社や共同住居などをつくり、「弱さを絆に」「精神病で街おこし」を続けている。著書に『安心して絶望できる人生』(NHK出版) など多数。

<http://www18.ocn.ne.jp/~bethel/>

私が最初に「べてるの家」に行った時に感じたのも
ワクワク感でした。「これはなんだ？」と、
とまどいながらワクワクしたのを思い出しました(辻)

にしたりしてきたわけですが、そのどちらも極めて自己中心主義です。自分たちの価値観が前提にあるのです。私は、文化人類学者であるレヴィ＝ストロースの「自民族中心主義」という言葉にふれて「ああ、そうか」と非常に納得できたのです。レヴィ＝ストロースは「ヨーロッパが一番進んでいて、アジア、アフリカが遅れているというのは自民族中心主義だ。みんながヨーロッパを目指しているわけではない。それぞれが独自の文化をもっているのだ」と言いました。まったく理解できないものに出合った時、自分の価値観で判断するのではなく、異文化として見ればよいということです。そこから別の世界が見えてくるというのがすごくおもしろかったのです。働き盛りの世代が中心で、障害者は劣った存在、老人は庇護の対象・リハビリの対象であるというのは、まったく「自世代中心主義」だと思いますね。

辻 三好さんは、介護の仕事をした最初に感じた感覚を「何でこんなにワクワクしてるんだろう。結局それは異文化だったんだ」と表現されていましたが、私が最初に「べてるの家」に行った時に感じたのもワクワク感でした。「これはなんだ？」と、とまどいながらワクワクしたのを思い出しました。

「当事者研究」の輪に入って、大笑いしたり、泣きそうになりながら、ああでもないこうでもないと、いっしょに考えている自分がうれしくて……。

向谷地 いわゆる精神障害は、病気なので、治療方法は科学的でなければいけない、科学的な根拠をもってアプローチしなきゃいけないとされてきました。そのために統合失調症をもった人たちの豊かな経験がそぎ落とされて、幻覚・妄想の世界も切り捨てられてきたのです。「当事者研究」は、むしろその世界に、当事者自身の立場の中に私たちも入って、そこを生きる知恵を当事者から教

当事者研究って何？

どうにもならない自分を他人事のように考えてみる。するとなぜだか元気になってくる。「べてるの家」が始めた不思議な研究。合い言葉は、「自分自身で共に」。そして「無反省でいこう！」詳しくはホームページを。身につまされて、元気になれるコメントがいっぱいです。

えてもらったり、またいっしょに考えていこうというアプローチなのですが、やってみると、今まで治療が切り捨ててきた無意味で異常な世界と言われていたものがじつにおもしろいんです。これはきっと認知症のお年寄りの世界にも共通するのではないかと思います。

近代の罪、常識の力

三好 今、認知症の世界に科学の光を当てなければいけないという波が押し寄せてきています。先日も NHK で認知症の番組をつくるにあたって、医師を登場させる、させないで相当やりあいました。問題行動はだめ、周辺症状と言いなさいというのです。症状という言い方は医療の世界の言葉です。ここがどこかわからないのを見当識障害と言いますが、自分は何歳で、ここをどこだと思っているのかという中身がおもしろいわけです。その人の内面世界がわかって、なぜその世界に帰らざるを得ないのかという必然性が見えて、私たちの関わり方も見えてくるわけですから。医療では見当識障害はあってはいけない世界、薬で何とかしてしまえ、これだけですよね。

辻 ちょっと待ってください。番組で「この言葉を使っちゃいけない、あの言葉を使っちゃいけない」というのがあるわけですね？

三好 そうなんです。NHK 独自の規制があるんですよ。

辻 そうすると、三好さんは言うことがなくなっちゃうじゃないですか (笑)。

三好 私は原理主義でありながら現実主義者ですから (笑)。いまだに私は「認知症」を使わないで「痴呆」と言い続けているのですが、「痴呆」を本のタイトルに使うとインターネットで検索されませんから、副題に「認知症」を入れたり…。原理主義だけで言うては意見が届かないし、現実主義になると自分がなくなるような気がするから、そこのバランスをいかにとるかという綱渡りをやっています。

認知症の治療はひどいものです。医療の光を与えればどうにかなるという幻想を振りまいているけど、薬が効いたことはないですよ。

向谷地 統合失調症の治療は、80年代は薬物療法が中心でした。日本は世界で一番抗精神病薬の投与量が多い国なのです。最近になって、製薬メーカーから当事者研究の話をしてくれという講演依頼が来るようになりました。いい意味で反省期に入ってきているところですね。

三好 医者診断と処方絶対的・客観的に正しいということが前提になっているので、患者が拒否するという想定がないのです。患者に点滴の指示を出すのは正しいけれど、快・不快の原則で生きている認知症老人が2時間もじっ

としているはずがない。必ず抜きます。そうすると手を縛る。近代的な医療が、人を縛るという野蛮とすぐくっついちゃう。科学がその後ろ盾になっているところ、科学の底の浅さが見えるなという気がします。

向谷地 精神医療もそうです。非常に科学的な根拠に基づいた治療を学んできたプロ集団が患者を閉じこめたり縛ったりしています。縛り方とか保護室の入れ方など、教科書のどこにも書かれていないものが現場では主流を占めている。

私たちが物事を科学的に思考するようになったのは200年前からと言われてます。ちょうど、統合失調症が明らかにされた時期と重なるのです。そういう意味で、科学は私たちの人生観とか社会観・世界観に大きく影響しているような気がしますね。

三好 たしかに、中世の頃の病気は悪霊が原因とされていたわけで、それに対して、具体的に目に見えるものの中に原因があるとした近代科学は、画期的な思考の転換だったと思います。科学的根拠を示せというのは、悪霊とか見えないものではなくて、誰にでも納得できるもので根拠を示せという意味だったと思うのです。それが行き過ぎて、今は「とにかく数字にしろ。データにして出せば科学的なんだ」という状態に陥っている。

昔、ヒステリーは子宮の病気だと思われていました。女性しか起こさないから、女性にしかない臓器に原因があると考えたわけです（笑）。今はヒステリーが子宮の病気だというと笑い話ですが、おそらく何十年後には、「認知症は脳の病気だって言ってたんだよ」と笑い話になるでしょうね。

認知症はβアミロイドが沈着することが原因だと言うのですが、私は入院して3日でぼけた人をたくさん知っています。3日で沈着するわけがない。βアミロイドは何年もかけて沈着していくのです。沈着があってもぼけの症状は出ないで死んでいく人もたくさんいます。老化現象にすぎないβアミロイドの沈着が認知症の原因であると、そういうことがまことしやかに言われる変な世の中だから、「科学的」は信用しないほうがいいんじゃないかという気が私はしています。専門家の言うことと常識が反したら、常識についたほうがまず間違いない。専門家の世界は、今やっているものが5年後には間違いだったと平気で言う世界ですから。

おばちゃんが世界を救う

辻 三好さんの本に出てくる、科学を背負っているスタッフと、まったく科学的でないおばちゃんたちのやりとりが、じつにおもしろい。私はゼミで「おばちゃん論」をやっているんですよ。

三好 おばちゃんは不思議です。だけど、それで学問になるんですか？（笑）。

辻 うん。フィールドワークに出ておばちゃんを観察してくるんです（笑）。

三好 介護の世界はおばちゃんパワーでもっています。縛られたり、「もう病院でできることはありません」と言われて目がとろんとなっているばあさんを、おばちゃんは6か月ぐらいかけて、笑顔が出てオムツが外れて…と、元気なばあさんに変えていくのです。専門性はないですよ、本は『女性自身』ぐらいしか読まないから（笑）。差別用語を平気で使うおばちゃんが老人を怒ります。でも、怒られた老人はにこにこしているのです。確かに、おばちゃんの言葉の意味はきついし差別的なんだけど、ぼけ老人は言葉を意味ではなく、音として聞いているのですね。そうすると、意味はきついけど、口調が母性的なんです。逆の人もいますよ。意味は正しいけど口調がきつい人。「あら、おもらしなすったの？ よろしいわよ」という感じ（笑）。

辻 三好さん、前者は「おばちゃん」、後者は「おばさん」、これがうちのゼミの結論です（笑）。やっぱり希望は「おばちゃん」ですね。

差別用語といえば、向谷地さん、べてるの家に「差別・偏見大歓迎」とありますね。最初見た時はびっくりしましたが、この考え方について説明してください。

向谷地 今の話と非常に通じるのですが、専門家が専門的な立場から専門的な視点で適切に関わるだけでは、人は元気になれないのです。いろいろな人にもまれて、困ったり、喜んだり、落ち込んだり、笑ったり、挫折したり、ひどい言葉を浴びせられて愕然としたり、しかし誰かに支えられたり助けられたりという、さまざまな人の中に生きるという多様性というか、豊かさの経験が人を成長させるのだと、私は思っています。

今日は統合失調症を抱えている森くんといっしょに来ました。ちょっと自己紹介を。

森 私は統合失調症を抱えた当事者の森亮之と申します（拍手）。今回は北海道

にある当別町という、向谷地さんが勤めておられる大学の町からやってきました。どうぞよろしくお願ひします。

向谷地 森くんは3年、4年ぐらい前までほとんど家の中に引きこもって、爆発を繰り返していました。

三好 爆発って何ですか？

向谷地 壁に穴を開けたり、暴言を吐いたり、いろいろなものを壊したりす



ることです。縁あって、私は森くんと知り合ったのですが、今日その時のことを聞いたら、みんなが自分を遠巻きにしているなかで、私が人間としてぶつかった感があるというのです。それは決して私が立派な人間であるとか、すばらしい感動的な出会いとかそういう意味ではありません。人間としてガツーンときたという、この感覚が自分の回復の一つのきっかけになっているという話をしてくれました。

三好 向谷地さんは豊かさの体験と言われたけど、むしろ「わい雑な関係」というか、清濁あわせ飲む関係が求められているんじゃないかな。「差別・偏見大歓迎」というのは一種の開き直りでしょう。

向谷地 福祉の教育では「突っ込みの激しい人は向かない」とか、「もう少し距離感をとって客観的に」などと言うのですが、むしろ私は、そんな人に出会うと「この人はいっぱい苦労しながらおもしろいことをやる人だ」と思うんです。

三好 PT・OTの世界もそうです。「冷静に、客観的に観察なさい」と言うわけです。専門家が冷静で客観的でなければいけないのは急性期の話で、介護の世界で冷静に客観的にやってちゃ老人は生きいきしません。冷静にというのは「冷ややか」、客観的にというのは「他人事として」ですから（笑）。さきほどの例でいけば、おばさんですね。私が話しかけた時と向谷地さんが話しかけた時は相手が言うことは違うのですから、客観性なんか無いのです。関係性があるだけの世界だから、この世界で通用するのはいっしょに泣いたり笑ったりできる人、おばちゃんです。だけど、共感的に関わっている自分をどこか冷静に見る目がないと困りますけどね。

この閉塞感を打ち破るもの

辻 ぼくは大学で仕事をしていますが、ますます多くの若者たちが病んでいます。その親たちもまた非常に苦しんでいる。ぎりぎりのところにきているな、と感じます。ぼくは環境運動家ですが、環境問題を語る以前に自分がもたない、そんな気がしています。

いわゆる健常者、あるいはまだ老いてない若者たち、元気だとされている人たちが抱えているこの生きづらさとは一体何なのか。お二人にそれぞれの立場から話していただきたいと思います。

三好 私の同級生にはいい大学に入って、一流企業に就職した奴がいっぱいいます。今、ちょうど定年を迎えつつあるところですが、彼らは自分の仕事にうんざりしているのです。出世しても自分で決めて動くことなんてできないんですよ。シンクタンクが決めた数字が下りてきて、それを達成するためにがむしゃ

自分の個性が全部出て、二度と同じものはつくれないという豊かさを味わえるのは、今の日本では介護と農業ぐらいじゃないのかな（三好）

らに働くことの繰り返しです。だから、団塊世代はそばを打ちたがるのです（笑）。自分で考えて、工夫して、結論がすぐ出る手づくり（ブリコラージュ）な仕事というわけでしょう。「そば打ちもいいけどね、だったらおまえ、介護の仕事をやれよ」と私は言いたい。

介護の仕事は、きついし、給料は安いし、上司は無理解。だけど、介護には、そういう契約関係を超越する醍醐味が確かにありますからね。だって、もう生きていくのをやめようとしていた人が、ここでもう一回生きていこうかという気持ちになる瞬間に立ち会えるのですから。そしてもしかしたら、自分がそのきっかけになっているのかもしれないのですから。それがおもしろくてみんな安月給でもこの世界にとどまっているわけです。

自分の個性が全部出て、二度と同じものはつくれないという豊かさを味わえるのは、今の日本では介護と農業ぐらいじゃないのかな。

辻 まさに今、若者たちはそっちへ向かっていると思いますね。学校じゃ教えてもらえないけど、ほとんど直感的に選んでいます。農業まではいかないにしても、農的なもの、あるいは手づくりの世界。

若い人たちは、異文化に接することによって、「あ、これありなんだ」とか「こんなんでもいいんだ」などというヒントをたくさんかき集めなくちゃいけない。何でもいいんです。ヒントをたくさん持ち寄って「こんなふうにしてなんとか社会は成り立つ」と思うことができれば、そこから本当の転換が始まるんじゃないかな。そういう意味では、介護の場、あるいは精神医療、障害者のコミュニティーの場には、じつは健常者にとって重要なヒントがいっぱい詰まっていると思います。

三好 介護でいうとぼけ老人でしょう。認知症なんていう医療の名前に変えられてしまいましたが、それはぼけを自分たちの世界観の中に取り込みたいからでしょう。異文化じゃなくて治せるものなのだと思うことで安心できるという発想なのです。

ぼけ老人という呼称には差別的ニュアンスがあると言うけれど、全然そんなことはありません。むしろ「ぼけた人」＝イノセント、純粹で無垢な人たちというイメージです。

ちゃんと関わればちゃんと反応してくれる、ごまかしが利かない人たちです。

今日は学生さんがたくさん参加されていますが、ぼーんとぼけ老人に当たって、「この人が言ってることは何だろう」と考えたり、オタオタしたり、わけがわからなくて足がすくんだり、そういう経験をたくさんするといいと思います。認知症は脳の病気で、こういう時にはこう関わればいいんだと思ってつ

きあっていると老人は少しも落ち着きません。「この人の言動にはちゃんと意味があるんだ」とわかってつきあう徘徊は、ちょっと違いますよ。

今日より明日がよくなるという妄想

向谷地 いわゆる生産革命が起きて、同じ形のものと同じ量だけ大量に生産するという生産方式が必要になって、そこで初めて人間は障害をもつ人ともたない人という選別作業を始めたんです。つまり、生産ラインに適應できる人たちとそこから外れる人たちです。特に、私は生産ラインに乗れない人間です。30分も同じ作業をやると、いらいらしてきます。

私たちはその選別を今も引きずっています。勉強も、仕事も、常にこの発想で考えているのではないのでしょうか。そして、学歴や偏差値が高ければ、人よりもたくさんの富や安心を手に入れることができるという発想のもとでみんな走り回っている。

そういう意味では、これは確実に妄想なんです。社会全体がある種の妄想を抱いているのです。そこから離脱した人たちを、統合失調症とか妄想のある人なんて言いますが、逆ですよ。

辻 若い頃は、今日よりも明日、明日よりも明後日という右肩上がりかフィットするかのような妄想が、現実的なものに見えやすいのでしょうか。年寄りになってみたら明らかにそれは妄想でしかないことがわかる。

三好 急性期の病院ではそれが成り立つんですよ。今日より明日、明後日はもっとよくなるんだから今日は我慢しましょうねというやり方。老人介護はだめですよ。老人は、むしろ今日が一番いいのです。明日にはもっとぼけるし年をとるんだから、今日笑顔を引き出さなければ明日はもっと難しいよ、という世界なのです。だけど、私はその時間の流れのほうがむしろ普遍的なのだと思う。

近代の光を当てても何の役にも立たないこの介護から世の中が変わっていくんじゃないかなあ。

向谷地 もし日本の国が変わらなきゃならないとしたら、人は本来弱いんだということをみんなが知って、それは克服されるべきものではなくて、むしろ当たり前のものでして大事にするという、そういう生活感のある国になってほしいものです。

三好 介護は、老いて死んでいくことを支える仕事なのですが、国の予

人は本来弱いんだということ、
当たり前のものでして大事にするという、
そういう生活感のある国になってほしいものです
(向谷地)

「人間の属すべき場所がここにはあるんだ」という感覚だったような気がするんです。(辻)

べてるの家で感じたあのワクワク感は、

算はそれを認めない。日本は、リハビリして元気にするとか、こうすると医療費が少なくなるとかでなければ、予算を出さないけちな国だと思う。ただ老いぼれていく過程に最期までつきあいますよ、それに金を出しましょうというのが文化じゃないかという気がしますけどね。辻　そこが日本の社会の住みづらさの決定的な点だという気がしますね。元来、共同体というものは、一人ひとりが抱えている弱さだとか、あるいは弱いメンバーを排除しないでみんなで生きていくという集団だったはずです。一方、近代的な組織は、強い人たち、何かを得意とする人たちを集めてきて組織をつくるわけですが、それはコミュニティの代わりにはなり得ません。日本の昔の会社は、能力にもでこぼこがあって、たとえば、仕事はあまりできないけれども宴会には欠かせないみたいな人にも居場所があった。それがもうこの10年、20年で急速にそういう場は奪われています。人間は、共同体の中でなければ生きていけない存在なのに、その共同体がなくなってしまっているのです。

私が「べてるの家」で感じたあのワクワク感というのは、「ああ、そうか。人間の属すべき場所というのがここにはあるんだ」という感覚だったような気がするんです。



暴走する日本

三好　日本ぐらい国全体で一斉に近代に向かって突き進むというのも珍しいのではないのでしょうか。アフリカの北にあるモロッコに行ったことがあります。肉眼でヨーロッパ大陸が見えるくらい地理的に近いのですが、近代化しているのはカサブランカ、ラバトというヨーロッパに近いところだけなんです。ちょっと奥に入ったフェズやマラケシュは中世の生活そのままですし、アトラス山脈という砂漠へ行くと、テントを張って砂漠の中で生活をしているベルベル人がいて、誰も近代を目指していない。別々の生活習慣が何千年と、並行して続いているのです。

ところが、日本はヨーロッパからこれだけ離れてるのに、日本中どこへ行こうが全部近代になっちゃってる。これは何だろう？

辻 橋を渡って、その橋を切り落としちゃったという感じですね。ヨーロッパなどを見ると、いろいろな形で歯止めが残してあって、ぶれるけどちゃんと戻っていく場所が用意されているという感じがしますが。

三好 フランスなんかいまだに日曜日の営業をやらないでしょう。

辻 ああいうのが歯止めですよ。ほくは、アメリカもじつは日本よりはずっと歯止めがあると思う。アメリカには戻るところがあるけれど、日本にはないんです。

向谷地 日本の精神医療がアメリカ的な非常に合理的な、非常に科学一辺倒のアプローチに侵食されるなかで、ヨーロッパは頑として人間に対するまなざし、人間の立場、人間主義を守り続けているような気がします。

たとえば、オランダではヒアリングボイスといって、聞こえること（幻聴）は決して統合失調症の人のみに起きる異常ではなくて、日常の中で大きなストレスがかかると生じるのだという発想をします。そして、テレビ番組でキャスターが「そういう声が聞こえた経験をもっている人は私に連絡してください」と国民に呼びかけて、多くの人たちがその経験を語る、そんな文化があるのです。

「べてるの家」でも誰の幻覚・妄想が一番すばらしいかを競う「幻覚・妄想大会」をやっています（笑）。今年は村中弘子さんがグランプリをとりました。彼女は統合失調症をもっていて、「あんなにかこの住居から出ていけ！」と言われた村中さんは「はいはい、わかりました」と言って、目の前の公衆トイレに布団を敷いて、そこで4日間暮らしたという強者です（笑）。

辻 賞を取ると、みんな「おめでとう」と言うのですか？

向谷地 そうです。本人もとても喜んでいました（笑）。

幻覚・妄想大会って何？
年に1回行われる「べてる祭り」恒例のイベント。1年間でもっともインパクトのある幻覚・妄想体験を起こした人を表彰するという世界で唯一の大会だ。

命の傾きを生きる

三好 浄土真宗に「還相^{げんそう}」という言葉があります。上（浄土）へ行

浦河では会社をつくっている仲間もいるし、さぼっている仲間もいます。すべての場で一番大事にしているのは「弱さの情報公開」です（向谷地）

くのが「往相^{おうそう}」です。普通は浄土へ行ったところで終わりなのだと思いますが、浄土から下界を見ると苦しんでいる人がたくさんいる。それで、もう一回穢土^{えいど}に帰ってくるのです。これが還相です。自分一人が悟っておしまいじゃなくて、もう一回帰ってくるというわけでしょう。親鸞上人はすごいことを言うなあと思うのです。吉本隆明は、知識を得ていく過程と、知識は何ほどでもないというふうにもう一回帰っていく過程という言い方をしたのですが、私はそれを「発達」と「老化」と考えています。往相は放っておいてもどんどんいくのです。大事なのは還相、帰り道をどうするか。吉本隆明は、これはいわば自然過程ではなくて意識的過程であるという言い方をしています。

老いを意味づける思想はないかと探して、出合ったのが一つは文化人類学です。そして、もう一つが浄土真宗でした。向谷地さん、キリスト教ではどうなんでしょうか。私は、キリスト教は神の国に向かっていく往相の世界という気がしているのですが。

向谷地 イエス・キリストは降りてきたわけですね。神的な存在であるにもかかわらず降りてきた。しかも降りてきた場所は、地上で最も卑しいと言われていた馬小屋でした。その降りてきたということの中に象徴的な愛のメッセージが含まれていると思います。

三好 ああ、そうか。

向谷地 精神障害の多くは思春期に発症します。ということは働き盛りに発症することが多いわけです。精神障害を人生の横道にそれたとか、大きな挫折と受け止め、もう一回引き戻そうとする力として医療は関わるのですが、それはちがうのではないかと私は考えています。

生命論的に考えると、私たちは生まれた瞬間から日々一日一日命が終わっているという存在です。一日一日命がカウントダウンされているという生命の傾きを受け止めながら私たちは毎日暮らさざるをえないのです。ある意味で非常にニヒリスティックな世界です。精神障害は、それをねじ曲げて上昇志向しようとしているとか、死なないように、苦勞しないようにしようとするある種の私たちの無理な頑張りの結果起きているような感じがするのです。

三好 日本はそういう命の傾きを見えなくすることが近代社会だと思っているのではないのでしょうか。インドへ行くと全部見えて、死にそうな人はいるわ、貧乏人はいるわ、こじきは来るわ、本当にどうしていいかわからなくなるのですが、考えてみれば日本にも同じように死にそうな人も病人も障害者もいるのです。ただ見えない。「ああ、見えな

左端がこのセッションの仕掛人、善了寺住職の成田智信さん。敷地内で「還る家ともに」というデイも実践中



「いだけなんだな……」と思ったら、インドのほうがまともじゃないかと思えてきました。

辻 若者がつらいのも、それが見えないからなのではないかとほくも思います。老いている人、病気の人、障害のある人など、いろいろな人がいることが見え、人が死んでいくところが見えれば、若い人は安心して生きていけるのではないか。この社会ではそれを私たちが隠してきたから、若い人たちは苦しいのではないか、そんな気がします。

向谷地 浦河では会社をつくっている仲間もいるし、さぼっている仲間もいます。すべての場で一番大事にしているのは「弱さの情報公開」です。

三好 いいなあ。今は弱みを見せられない社会です。社会に適応しているほうがむしろ異常な感じがするぐらいです。特に男社会はひどい。

辻 強がりの社会ですね。

向谷地 統合失調症の人もそうですよ。先日いろいろトラブルを抱えた40代の統合失調症のメンバー（男性）に「あなたの苦労はすばらしい、べてるの研究員にぜひなってくれ」と言ったら、「名刺つくっていいですか」（笑）。次の日に電話がかかってきて、「私は所長になれますか」（笑）。

辻 ちょっと立身出世主義が残ってる。

向谷地 やはり地位、名誉、立場、この三つが男には大事なんだなあと痛感しました。

三好 一緒に酒を飲んでも男は絶対に本音を言わない。それに対して、おばちゃんは本音ばかり（笑）。

辻 やっぱり今日の結論は、世界はおばちゃんのものだということで……（笑）。

みなさん、降りてゆく覚悟はできましたか。今日はすばらしい時間を過ごすことができました。ありがとうございました（拍手）。

2009年8月28日、善了寺で開催された「caf dela terra 2009晩夏」に加筆・修正しました。